

〔「生誕180年記念 鉄斎」展によせて〕

鉄斎の中国へのまなざし—近藤家旧蔵品を中心に—

大和文華館の鉄斎作品コレクションは、愛媛・松山市の三津浜在住の近藤家旧蔵品が中心になっています。明治18年(1885)から大正13年(1924)にかけて、鉄斎が近藤家当主の文太郎氏および後継の弥一郎氏にあてた書簡98通も所蔵されています。そのほとんどは近藤家から歳暮・中元として贈られた海産物への礼状ですが、自身や妻の病氣、引切なしの作品依頼への愚痴など、画家の近況が率直な語り口で述べられており、気が置けない交友のありさまがうかがえます。

富岡鉄斎は、幕末の京都に生まれ、儒学者としての修養を積みました。その中国文化への関心の高さ・造詣の深さは、江戸時代の文人たちのそれを継承したものといえます。しかし、鉄斎は先人たちとは異なり、鎖国政策の廃止された明治・大正という時代を生きました。この時期、中国大陸から日本へは、書籍・書画を含む美術品が大量にもたらされ、有名な中国入学者と直接交流する機会も格段に増えました。鉄斎自身は中国へ渡ることはありません

でしたが、京都大学の講師として大陸出張を数度経験した息子・謙蔵や、大陸とのパイプを持つ古書店・骨董商などを通じて、身の回りには多くの中国文物が蓄えられました。近藤家旧蔵品は、基本的に歳暮・中元の返礼であり、手軽な贈答品としての側面が強いものですが、それでも、明・黄克晦の作品を臨模した「百老図巻」や、指を使って絵を描く、清・高其佩の手法を用いたという「朱描鍾馗図」など、中国絵画史の教養を感じさせる作品が含まれています。

大正3年(1914)9月に制作された「魚藻図」(図1、大和文華館蔵)にも、中国南宋時代末期の禅僧画家・牧谿の筆法を学ぶ、との言葉が記されています。牧谿は、名僧・無準師範の法嗣で、室町幕府コレクションにおいて最も重視された画家の一人であり、それ以降の日本絵画史にも大きな影響を与えました。では、近代に生きる文人を自負した鉄斎にとって、牧谿とはどのような画家だったのでしょうか。

古書マニアであった鉄斎の膨大な蔵書コレクションの中には、元・

呉太素著『松齋梅譜』という稀観本がありました。この本を入手した鉄斎は、従来、元・莊肅『画継補遺』や元・湯屋『画鑑』に基づく、簡単な伝記しか知られていなかった牧谿についての新たな知見が得られたことに興奮し、自ら「僧牧溪の事」という小文を発表しています(『南宗画志』4号、1902年)。ここで鉄斎が目目しているのは、牧谿の画業ではなく、南宋末の奸臣・賈似道に逆らったというエピソードで、「奇節の有し僧」、「尋常の画僧にあらざる」と、その人格を賞賛しています。また、牧谿が平素酒を大いに嗜み、「酒のもとには君臣貴賤の別や、利益追求の謀、刑罰の禁忌がないのだ」と語ったという、諸書に伝わるエピソードも引用し、まさにその「胸臆の快活脱洒」を見るべしと述べています。そして、中国の画史に「粗悪にして古法なし」と批判される作風は、「酔興墨戲」と解釈すべきで、南宋がまさに滅びようとしているとき、そのような振る舞いで俗世を逃れようとしたのではないかと分析しています。このように、なによりもまず画家の精神性を重視する研究態度が、鉄斎の特徴といえます。『松齋梅譜』の読書経験を通じて、牧谿は、鉄斎にとって倣うに足るべき画家となったのでしょうか。また、その放胆・磊落なイメージは、強い筆遣いを得意とした鉄斎晩年期の画風とも相性がよかったと考えられます。

鉄斎は、「魚藻図」に先立ち、大正3年7月に、「牧谿の本に倣う」という「鯉魚図」(図2、『鉄斎研究』34号掲載)を制作しました。賛には、

龍門の滝を登って龍になろうという鯉の心情を詠う、唐・章孝標の詩を引きます。登龍門は科挙合格の喩えであり、ここでは、文人社会の伝統に則り、士大夫の象徴としての鯉が明確に表されています。「魚藻図」中央の鯉と「鯉魚図」のそれは、折れ曲がった体や、ぎょろっとした目玉、前に突き出した口などが類似しています。原本は不明ですが、牧谿と伝わる鯉図の図様を共通して採用したことは明らかでしょう。中部義隆「富岡鉄斎筆「魚藻図」をめぐって」(『美のたより』165、2009年)によって、「魚藻図」の鯉に鉄斎の自己投影が見られることが指摘されていますが、このような試みは「鯉魚図」の発展形であり、伝統的な文人の鯉観を継承したものと位置付けられます。

また、「魚藻図」の鯉をとりまく藻草は、「鯉魚図」に比べて、生命力旺盛でうごめくように茂っており、水をたっぷり含んだ、注ぎ散らすかのような筆墨法で表されます。鯉の図様にとどまらず、闊達で自由な筆使いに、奇僧・牧谿の「酔興墨戲」へのさらなる共感を見ることができるとは思いませんか。6年後に制作された、「潑墨山水(瀟湘夜雨)図扇面」(図3、清荒神清澄寺蔵、『鉄斎研究』72号掲載)、「漁村暮雨図」(図4、『鉄斎研究』33号掲載)においても、牧谿の法に倣うとあって、水の多い粗放な筆墨で山水が描かれています。鉄斎にとって牧谿が重要な人物であり続け、潑墨の画家としての牧谿理解が定着していった様子うかがえます。(植松瑞希)



図1



図2



図4



図3